

復活節第3主日礼拝説教「新しい命のしるし」

日本基督教団石神井教会 2017年4月30日

【旧約聖書日課】列王記上 17章17～24節

¹⁷その後、この家の女主人である彼女の息子が病気にかかった。病状は非常に重く、ついに息を引き取った。¹⁸彼女はエリヤに言った。「神の人よ、あなたはわたしにどんなかわりがあるのでしょうか。あなたはわたしに罪を思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか。」¹⁹エリヤは、「あなたの息子をよこしなさい」と言って、彼女のふところから息子を受け取り、自分のいる階上の部屋に抱いて行って寝台に寝かせた。²⁰彼は主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、あなたは、わたしが身を寄せているこのやもめにさえ災いをもたらし、その息子の命をお取りになるのですか。」²¹彼は子供の上に三度身を重ねてから、また主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、この子の命を元に返してください。」²²主は、エリヤの声に耳を傾け、その子の命を元にお返しになった。子供は生き返った。²³エリヤは、その子を連れて家の階上の部屋から降りて来て、母親に渡し、「見なさい。あなたの息子は生きています」と言った。²⁴女はエリヤに言った。「今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です。」

【使徒書日課】コロサイの信徒への手紙 3章1～11節

¹さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。²上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい。³あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。⁴あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。⁵だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。⁶これらのことのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下ります。⁷あなたがたも、以前このようなことの中にいたときには、それに従って歩んでいました。⁸今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。⁹互いに向そをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、¹⁰造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。¹¹そこには、もはや、ギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられるのです。

【福音書日課】マタイによる福音書 12章38～42節

³⁸すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに、「先生、しるしを見せてください」と言った。³⁹イエスはお答えになった。「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがすが、預言者ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられない。⁴⁰つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中になることになる。⁴¹二ネベの人たちは裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。二ネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさるものがある。⁴²また、南の国の女王は裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。ここに、ソロモンにまさるものがある。」

キリストと共に復活させられた！

主のご復活を祝ってから二週間になりますが、教会学校では引き続き、子どもたちとイースターの喜びを分かち合うときを大切にしているようです。それは、ただ「楽しい行事」を引き延ばしている、というようなことではないと思います。子どもたちにとっても、また、わたしたちにとっても、イースターの祝いを喜び、心に刻むことは、大切なことでしょう。主のご復活という、わたしたちの理性を超えた出来事を憶えるために、わたしたちは、じっくりと時間をかけることも必要なのです。

この二週間のときを、わたしは、少しばかり特別な思いを与えられながら、過ごしてきました。この時期に、かつて共に教会生活を親しく送らせていただいた二人の方が、相次いで亡くなられたのです。お二人ともわたしの親世代の方で、一人はわたしどもの前任地の教会の方、もう一人はわたしの母教会の方です。お二人は別々の教会の方でしたが、奇しくも同じように、イースターの祝いの中で教会が共にあずかった聖餐を牧師が病床に届けてくださり、息を引き取られる二日前に生涯最後のパンと杯をお受けになられたとのことでした。復活の信仰を共に生きる教会の交わりの中で、最後の主の聖餐にあずかられたお二人は、どれほどの励ましを与えられたことかと思いました。聖餐は、天上の神の祝宴が地上に投影されたものだと言われています。恐らく、お二人ともご自身の地上での歩みが残らずかであることを自覚しながら、なお、地上の生涯では終わらない、肉体の死では終わらない、神の永遠の命のうちに共に生かされているという信仰を確かめられたことでしょう。そして、葬儀に加えられた残された方々も、また、同じ復活の信仰を確かめるときを与えられていらしたと、思われました。

礼拝の交わりを通して、特に聖餐の交わりを通して、わたしたちが、一つの復活の信仰に生かされていることを確かめ合うことができるならば、教会は、本当に幸いな場となるでしょう。わたし自身、牧師として、そのような礼拝の営みを整え、また聖餐の交わりをそれぞれの方の住まわれるところ、臥せていらっしゃる場所にまでお届けする働きを果たしていきたいと、切に願う者です。

もちろん、わたしたちは、死後のことばかりを考えて、復活の信仰に生きているわけではありません。むしろ、わたしたちは、死後のことよりも死ぬ前のことを考えて、復活の信仰に生きるように導かれている、と言うべきなのです。コロサイの教会に宛てた手紙の中で、使徒パウロは、「**あなたがたは、キリストと共に復活させられた**」と記しています。復活の命は、わたしたちが死後与えられるものではなくて、すでに今与えられているものなのです。むしろ、わたしたちが教えられてきた復活の信仰とは、今、この地上を歩んでいる生涯の中で、すでに、ひとたび死に、新たな復活の命を生きるようにさせていただくことでしょう。ですから、パウロは、まだ生きている教会の人たちに向かって、「**あなたがたは死んだのであって**」とも言うのです。わたしたちの復活の信仰に生きる交わりは、死後の、天上のものに限定されることなく、この人生のうちで、地上にあって、すでに与えられているもの、地上の教会に与えられているものなのです。

「しるしは、ない！」

多くの皆さんにとっては、当たり前のことを今さらのように申し上げました。けれども、そうであってもなお、復活の信仰に生きるということは、キリスト者にとっても、そうでない方にとっても、いまだ多くの躓きとなることかもしれません。わたしたちの周囲の人たちは、どのような宗教であっても多くの場合、葬儀に際しては、故人が天国に行った、という表現を当たり前のようになっています。「天国」と呼ばれる死後の命の世界を、驚くほど多くの方が信じているのです。「故人は、今も、天国でわたしたちを見守ってくれている」といった具合に、です。にもかかわらず、「キリストが復活された」というような言葉を聞かされると、途端に耳を塞いでしまうという場合が少なくない。「復活」というようなことは、非科学的で、迷信を信じる愚かなことだと、切り捨ててしまうのです。「天国」を無条件で信じているような人でも、「復活」には理屈を求め、証拠を要求するというようなことがある。

今日の福音書では、主イエスに対して、律法学者やファリサイ派の人々が、「先生、しるしを見せてください」と要求しています。主イエスが神から遣わされた方であること、主イエスの教えが真実であることを明確に指し示す証拠を、求めたのでしょう。確かに、今日の旧約の物語では、預言者エリヤが神の人であることを、やもめの女は、自分の息子を生き返らせてくれたという実証によって、認めました。「今、わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です」と。旧約でも新約でも、神は、ときにご自身が遣わされた者の真実であることを、何らかのしるしをもって人々に示されることがある、ということを物語っています。律法学者やファリサイ派の人々がしるしを求めたのも、一理あるのです。

けれども、そうだとしても、わたしたちは、ここで立ち止まらされるのです。彼ら律法学者やファリサイ派の人々は、純粹に「しるしを見せてもらえさえすれば、認められるのだが…」というような思いからしるしを求めたのか、ということです。そうではないかもしれません。そうではなく、主イエスを拒絶するために、しるしを要求するということをしたのではないのでしょうか。

それは、死者が迎えられる「天国」を無条件で信じているのに、「復活」を否定しようとする者と似ています。「復活」を否定しようとする者は、実は、別のものを否定して、拒絶しているのです。何を否定し、拒絶しているか。主イエスを否定し、神を拒絶しているのです。主イエスとの出会いを否定し、神との出会いを拒絶しているのです。

出会いというものは、単に物理的なことでもなければ、社交的なことでもありません。出会いは、ときに、それによって自分自身がまった新たに変えられる出来事です。出会いによって生まれた相手との結びつきによって、自分が、それまでとはまったく違う者に作り変えられることです。だからこそ、人は、ときに出会いを避ける。出会いを恐れる。ましてや、神との出会いによって自分がまったく変えられてしまうことを、拒もうとしてしまうのではないのでしょうか。

上にあるものに心を留めよう！

「しるしを見せてください」としるしを欲しがった律法学者たちやファリサイ派の人たちが、本当に欲しかったのは、自分が決して変えられない確かなもの、だったのかもしれませんが。客観的なしるしであれば、それはいつでも、自分でコントロールできるのです。好きなときに、好きなように、それを用いることができるのです。そのようなものは、しかし、二千年前の律法学者やファリサイ派の人たちばかりが欲しがったものではないと思います。わたしたちも、どこかで欲しがっている。わたしたちは、日常生活の中でも、仕事の中でも、自分の利用可能なしるしを、どれほど多く求めているかと思います。それどころか、教会の中でも、信仰生活の中でも、同じような求めを、心のどこかに持っている。

主イエスが、「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがる」とおっしゃられたのは、わたしたちのことでもあるのでしょうか。神を求めているようでありながら、本当は、神から確かなしるしだけをもらえれば良いと考えていないのでしょうか。キリストに従うと言いながら、本当は、キリストのありがたい教えだけをいただいておけば良いと考えているところがないのでしょうか。

わたしたちにも「しるしは与えられない」のです。それは、よこしまで神に背く要求だからです。神との出会いを拒み、キリストを否む求めだからです。

ただ、預言者ヨナのしるしは与えられると、主イエスはおっしゃいました。ヨナは、神から異国ニネベの町に遣わされましたが、それを拒んで逃亡しようとした預言者です。けれども、ヨナは、嵐の海に投げ込まれ、大魚の腹の中で三日三晩過ごし、そこで神と向き合った後に、陸地に戻され、あらためてニネベの町に遣わされたのです。いわば、一度死んで、新しい命を与えられたヨナでした。そのヨナの告げる神の裁き言葉を、ニネベの町の人々を恐れをもって聞き入れ、悔い改めて神に立ち帰ったと言います（旧約聖書・ヨナ書）。

ヨナは、自ら神に逆らったことを悔い改めて、神に立ち帰り、預言者として新しくされて、ニネベの町に向かったのでしょうか。ただ、主イエスは、そのヨナよりもまさるのが、ヨナの説教を聞いて悔い改めたニネベの人々だと言うのです。大魚の腹の中で三日三晩過ごして悔い改め、新しい命を与えられたヨナ。そして、そのヨナの言葉によって、神に立ち帰り、悔い改めたニネベの町の人々。

これは、主イエスの死とご復活、そして、わたしたちの悔い改め、神によって新しい復活の命に生きるようになることを指し示しているのです。神は、わたしたちが新しく変えられることをお望みくださっています。自分でコントロールできるけれども地上のものにすぎないものではなく、天の上にあるもの、神の御心、神の御姿に似た新しい人になることを、お望みくださっているのです。わたしたちの悔い改め、神への立ち返り、新しい神の人になること。このことのためにこそ、主は死んで復活され、今、お会いくださる。ご自分の命よりもなお貴い、まさったものとして、わたしたちの新しい命、復活の命をお喜びくださる。

だから、とパウロは言うのです。「上にあるものを求めなさい。…上にあるものに心を留めなさい」。わたしたちの命は、キリストと共に神の内にあるのです。